袖競（そでくらべ）〔むかし山科竹鼻（しなたけはな）のほとりに麁屋（そをく）の市場ありと見へたり、今定かならず〕

拾　玉　あはれなり是も世渡るいほぞかし其山科（やましな）の袖くらべまで　慈　鎮

〔宇治拾遺云、山科（やましな）の道つらに四の宮川原といふ所に、袖くらべとてあき人のあつまる所あり。又盛衰記云、東路や袖くらべ行も皈るも逢坂（あふさか）と続たり〕

夫　木　都をば今朝ぞ立つる旅衣袖の河原の霧のまよひに　衣　笠　内　府

和哥草山暁千鳥　霜さゆる袖の河原のさよ千鳥たが帰るさの涙とふらん　心　敬

明王寺（みやうわうじ）〔山科陵村（しなみさゝぎ）街道より五町ばかり北藪の中にあり。禅宗、中興龍洲禅師（りようしう）〕

本尊十一面観音〔慈覚（じかく）大師の作、立像四尺。脇士文殊、普賢。又脇壇に観音を安置す。此腹内に閻浮檀金一寸八分観世音の像安置す。伝云、天智（てんち）帝の御冠に納め給ふ尊像なりとぞ。毎歳元三に御戸開あり〕辨財天祠〔仏殿の側にあり。天降給ふ尊像とかや、水晶の中に安置す〕

鏡池（かゞみいけ）〔寺内にあり。天智（てんち）帝登天し給ふ時、此池水に玉体をうつし給ふとなり。霊水寒暑に増減なし。又此陵村（みさゝぎ）に天智（てんち）帝の臣下の苗孫今にありとぞ〕

鏡山〔明王寺の後山をいふ。藻塩草云、天智帝の御陵なり。詞林采葉抄云、鏡山は三所にあり、山城、近江、豊前〕

万葉集第二従山科御陵退散之時

長　哥　やすみしるわが大ぎみのかしこみや御陵つかへる山科の鏡の山によるはもよ

額　田　主

安祥寺〔高野堂と号す、由縁前編に見へたり〕

伊勢物語　女御高子かくれ侍て、安祥寺にて後のわざし侍けるに、人々さゝげもの奉れるを見てよみ侍ける。

続　後　撰　山のみなうつりてけふにあふことは春の別れをとふとなるべし　業　平

安祥寺に閑居して年をかさね侍りける時

続　門　葉　老が身に世のうきことのなぐさむは今いく程と思ふばかりを　法　印　観　瑜

青龍権現〔当寺の鎮守なり。真言伝云、当山の開祖少僧都恵運は、大唐の商客李処人等が舟に付て、承和九年八月廿四日に入唐す、是唐土の会昌二年也。武宗仏法を滅せし時に値ふて、青龍寺の鎮守青龍の御体を取奉て帰朝す。仁明帝の御宇嘉祥元年八月に、太皇大后追福の為に安祥上下両寺を建立して御願を始行す、此寺に唐朝より将来する所の青龍の御体を安置し奉りて寺の鎮守とす云云。今観音堂の西の傍にあり、文禄年中高野山応其上人再興す〕

松坂（まつざか）

〔粟田口（あはたぐち）より日岡（ひのをか）に登る坂路をいふ〕

〔日吉社行幸記云、元徳二年三月京都（きやうと）の貴賤、三条河原（でうがはらあはたぐち）粟田口辺にいたるまで車桟敷かまへあり、松坂（まつざかひのをか）桧岡をこえ、五位墓四宮河原（しのみやがはら）になりぬれば、鴨長明（かものちやうめい）が述懐せし外山はるかに見へわたり、まがきは山とながめて、遍昭（へんせう）僧正のすみけん花山もとをからで、けさはかすめる音羽山（おとはやま）、山科（やましな）、如意山（にやいさん）、安祥寺（あんしやうじ）、松の戸ふりてまか〳〵し、岩田森（いはたのもり）、鵠坂（くゞいざか）、駄餉の御まうけもうるはしくありけるとなん〕

道の記　かへりこん程をちぎらん忘るなよ我まつ坂の松ならばまつ　長明